

タイヤル族のキョーダイ関係と出産の穢れ

山路 勝彦

1982年論文で、筆者はタイヤル族の親族紐帯の顕著な特徴を論じたが〔山路勝彦, 1982: 20—44〕, その中でキョーダイおよび義キョーダイの関係の重要性に注意を促しつつ, 出産は産婦の男キョーダイに不浄をもたらすので, その穢れが必要だとする民俗信仰をとりあげ, それとともに, 子どもの出生にさいしては, 妻の男キョーダイからする認知を伴うという事実も指摘し, それらの問題がはらむ意義を検討しておいた。その後, 筆者は1982年8月より83年3月まで, および83年7月より9月まで, 野外調査に携わる機会に恵まれ, さきの論文で指摘しておいた諸点を再確認することができた。野外調査は主に台湾苗栗県泰安郷の汶水地方, タイヤル語の呼称でいえばマイリナフ Mairinax で行なったけれども, 本稿はそのときに得られた資料を整理したものである。

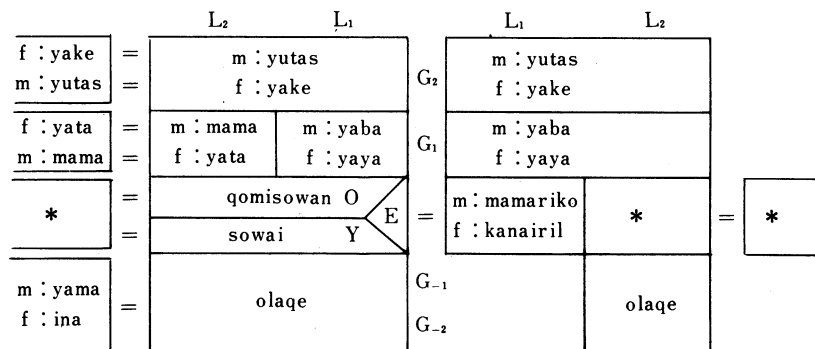
1 キョーダイ名称

この主題を扱かうにさいしては, 親族名称の検

討は不可欠なる作業なので, はじめにその名称について整理し, その体系の概要をみておくことにしよう。第1図と第2図は親族関係名称の体系を整理し, 図示したものである。これらの図をとおして, 自己と同世代の姻族名称がことのほか複雑になっているのがわかるのだが, その点は後に論ずることとして, さしあたっては, 2つの図を参照しながら, 個々の名称語彙について, 説明をしておきたい。煩雑になるけれども, 語彙解釈にさいしては漢語的表現を混えた日本語を使うこととして, 以下, 列挙してみよう。

- yutas=父の父, 母の父, およびその同世代傍系の男性。yake の配偶者。自己の配偶者の父・母の父, およびその傍系男性。
- yake=父の母, 母の母, およびその同世代傍系の女性。yutas の配偶者。自己の配偶者の父・母の母, およびその傍系女性。
- yaba=父。配偶者の父, およびその兄・弟。
- yaya=母。配偶者の母, およびその姉・妹。
- mama=父母の兄・弟らその同世代傍系者。

第1図 マイリナフの親族関係名称

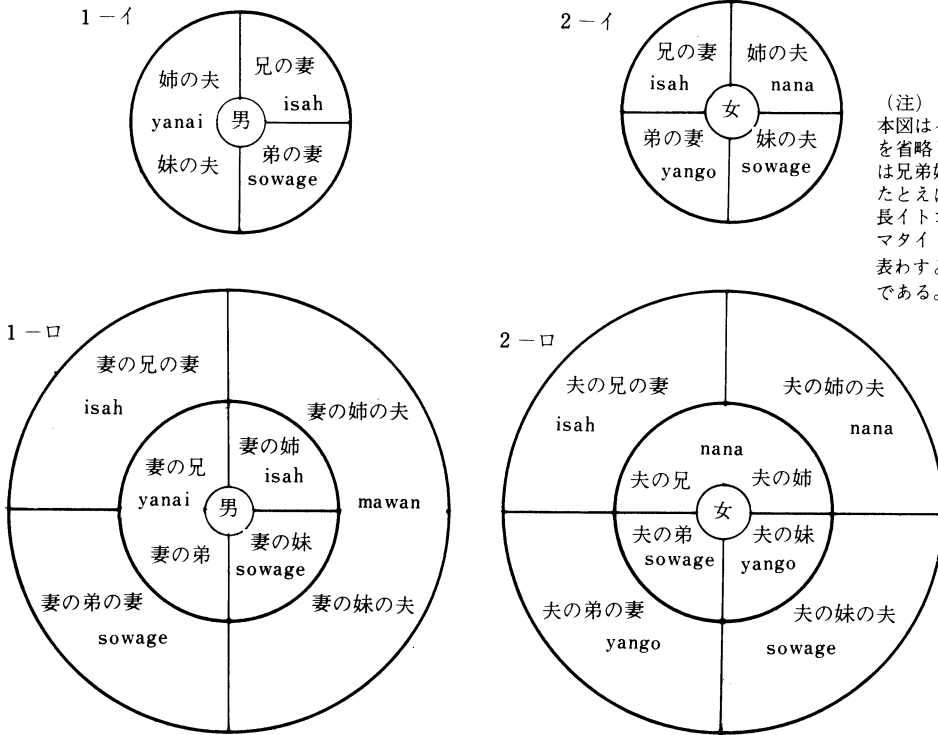


記号説明

- E : 自己
- G : 世代
- = : 婚姻関係
- L₁ : 直系
- L₂ : 傍系
- m : 男
- f : 女
- O : 年長
- Y : 年少

*印は第2図参照

第2図 マイリナフの同世代姻族名称



(注)
 本図はイトコ、マタイトコを省略しているが、それらは兄弟姉妹に準ずる。たとえば「兄の妻」で「年長イトコ男性の妻」、「年長マタイトコ男性の妻」をも表わすとす。第3図も同じである。

yata の配偶者。
 yata = 父母の姉・妹らその同世代傍系者。
 mama の配偶者。
 qomisowan = 兄、姉および自己と同世代の年長者、つまり従兄・従姉(いとこ)、再従兄・再従姉(またいとこ)など類別的兄・姉。
 sowai = 弟、妹。および自己と同世代の年少者、つまり従弟・従妹(いとこ)、再従弟・再従妹(またいとこ)など類別的弟・妹。
 mamariko = 夫。
 kanairil = 妻。
 olaqe = 子、孫、おい、めい(直系傍系かつ性別を問わずに下位世代者を指称)。および自己の配偶者の qomisowan もしくは sowai の下位世代者。
 yama = 自己の olaqe の配偶男性。
 ina = 自己の olaqe の配偶女性。

説明が長くなったが、自己を取り巻く系譜空間がどのような規準で弁別されているのかは、第1図に簡便に表現されているので、詳しくはその図を参考にしていただくとして、ここでは今まで列

挙した名称を基に簡単に必要事項のみを指摘しておく。その第一点は、自己と同世代はコミソワン qomisowan かソワイ sowai かのいずれかに該当するが、この弁別基準は相対的年令に基づくもので、つまり自己より年長か年少かによるもので、直系傍系の区別、性の区別は考慮されていない、ということである。そして、ほぼマタイトコ程度までこの名称があてがわれる。このような単純な二分法は、後にみるような姻族名称の複雑化と好対照をなしている。

第二点はそれ以外の世代に関してであって、自己の下位世代では、直系傍系の基準、性別の基準、年令の基準は、いっさい無視されるのだが、上位世代では直系傍系の基準と性別の基準とが存在している。上位世代の傍系親についてさらにいえば、自己との年令差は考慮されず、続柄関係に従って系譜上の位置が確定されることを、注意しておくべきである。たとえば、極端な例を挙げると、自己より若い母の弟がいたとしても、彼はその続柄に従って、あくまでもママ mama と称謂されることになる。なお総称的用法としては、親子に相

当する語彙はなく、ただ次の二語が存在するのみである。

matasa-sowai = qomisowan と sowai を包括する総称語。

masa-siyahau = 夫婦。

自己の同世代姻族名称（第1図では※印をつけた部分）は、第2図に詳細に図示しておいたが、この図からわかるように、その体系は複雑であって、話者の性別により語彙が異なることに特徴が見出される。そこで話者の性別を基準にして、この体系に登場する語彙の補足説明を与えると、次のとおりである。

1-1イ、話者が男性のばあい、matasa-sowai の配偶者は、

isah = 兄の妻、従兄の妻、再従兄の妻。つまり類別的兄の妻。

sowage = 弟の妻、従弟の妻、再従弟の妻。つまり類別的弟の妻。

yanai = 姉・妹の夫、従姉・従妹の夫、再従姉・再従妹の夫。つまり類別的姉・妹の夫。

1-1ロ、話者が男性のばあい、配偶者のmatasa-sowai は、

isah = 妻の姉、妻の従姉、妻の再従姉。妻の兄の妻、妻の従兄の妻、妻の再従兄の妻。つまり妻の類別的姉、妻の類別的兄の妻。

sowage = 妻の妹、妻の従妹、妻の再従妹。妻の弟の妻、妻の従弟の妻、妻の再従弟の妻。つまり妻の類別的妹、妻の類別的弟の妻。

yanai = 妻の兄・弟、妻の従兄・従弟、妻の再従兄・再従弟。つまり妻の類別的兄・弟。

mawan = 妻の姉・妹の夫、妻の従姉・従妹の夫、妻の再従姉・再従妹の夫。つまり妻の類別的姉・妹の夫。

2-1イ、話者が女性のばあい、matasa-sowai の配偶者は、

isah = 兄の妻、従兄の妻、再従兄の妻。つまり類別的兄の妻。

yango = 弟の妻、従弟の妻、再従弟の妻。つまり類別的弟の妻。

nana = 姉の夫、従姉の夫、再従姉の夫。つ

まり類別的姉の夫。

sowage = 妹の夫、従妹の夫、再従妹の夫。つまり類別的妹の夫。

2-1ロ、話者が女性のばあい、配偶者のmatasa-sowai は、

nana = 夫の兄・姉、夫の従兄・従姉、夫の再従兄・再従姉。夫の姉の夫、夫の従姉の夫、夫の再従姉の夫。つまり夫の類別的兄・姉、夫の類別的姉の夫。

isah = 夫の兄の妻、夫の従兄の妻、夫の再従兄の妻。つまり夫の類別的兄の妻。

sowage = 夫の弟、夫の従弟、夫の再従弟。夫の妹の夫、夫の従妹の夫、夫の再従妹の夫。つまり夫の類別的弟、夫の類別的妹の夫。

yango = 夫の妹、夫の従妹、夫の再従妹。夫の弟の妻、夫の従弟の妻、夫の再従弟の妻。つまり夫の類別的妹、夫の類別的弟の妻。

自己のキョーダイ¹⁾が、話者の性別は問題にならず、ただ相対年令のみによって弁別され、年長・年少の二種に分類されているのに対して、同世代姻族名称に関しては、話者の性別によって体系自体が異質になってしまうありさまが、第2図で浮彫りにされている。話者の性別に応じて姻族名称語彙が異なるという特徴は、同じタイヤル族でもサデック系統にはこれほど顕著にみられず〔山路勝彦 1982〕、したがって名称の体系のうえでも、かなりの変差がタイヤル族にはあることが知れるのだが、さしあたってはマイリナフの住民の体系をさらに整理しておきたい。まず女性話者のばあい、キョーダイの配偶者は性と相対年令との二種類の基準の適用を受け、四分割式体系をはなすのに対して、配偶者のキョーダイは年長者の性別が問題にされずに三分割式体系をなしているのに気づかれよう。しかしそのまた配偶者は再び四分割式体系となる。男性話者のばあい、キョーダイの配偶者および配偶者のキョーダイとも、女性当事者にのみ相対年令の規準が設けられ、結局三分割式体系となっている。男性当事者は年令による弁別が働かず、結局ヤナイ yanai かマワン mawan かのいずれかに該当し、しかもこの両語は相互的

1) 以下、本節では特に断わりがない限り、カタカナでキョーダイと表記するときは、性別にかかわらず自己と同世代のイトコ、マタイトコも含ませた、類別的用法を意味している。タイヤル語のマサソワイに該当する語が日本語にはないので、便法上このような用法を採用する。

に使用される点で、他の語彙とは著しく性格を異にしている。

同世代の姻族名称だけがことさら複雑化していく原因は掴みえないのだが、この複雑化した名称体系のなかで、ヤナイは日常生活のさまざまな場面で重要な役割を担って登場してくる。次節以下にみるように、実にヤナイの活動には目を見瞠るものがある。この妻の男キョーダイ対女キョーダイの夫の関係、そして、その根幹をなす兄弟対姉妹の関係こそは、マイリナフの住民の親族行動の中核をなすのであり、以下、これらの関係に照準をあわせ、論述していくことにしよう。

2 キョーダイ関係と禁忌の慣行

マイリナフの住民は、プサニック psaniq という語をしばしば発するけれども、この一語には日常生活の行動規範が凝集されている。psaniq とは男ことばで、それに該当する女ことばは paian であり、それらは「不吉」、「不浄」、「禁忌」という意味をもっているのだが、以下の事例が示すように、法的な意味での禁忌事項は同時に宗教の見地からも禁忌であることを教えている。

日常生活でプサニックとみなされる現象は多岐にわたっていて、たとえば、変死体に触れたり、墓を掘り起したりすることは、まさしくプサニックであり、それらの行為は不吉をもたらし、不浄であるがゆえに禁忌とされる。離婚や姦通も、旧慣が支配的であった頃は、プサニックとして厳しく叫弾されていたし、殺人や窃盗・傷害事件も同じくプサニックである。当事者の将来を暗くするばかりか、その身内にも、時として不幸を招来してしまうと考えられていたので、それらの現象は不吉な出来事であり、したがって禁忌である。

さて、照準を親族の領域に移し、プサニックとみなされる現象を拾い出してみると、兄弟姉妹、イトコ、マタイトコという同世代にあって、かつ異性関係に立つ者同志、およびさきに示した姻族名称中のヤナイの関係に立つ者同志では、旧慣時代には厳しい禁忌事項が存在していた。それらの禁忌事項は、大別すると、性と排泄行為に関する事柄であって、現代では弛緩したとはいえ、年配者の言動の中には、その禁忌は今なお息づいてい

る。とくに性に関わる行動は、旧慣時代では、厳しい掟で支配されていて、次の事例をみるにつけその感を深くする。その事例は他の地域での別の事柄に関わる聞き書きであるけれども、タイヤル族全般に通じる性に対する潔癖さがよくうかがえて、この種の議論に参考になる。すなわち、

第二次大戦で、戦地から帰還した男たちの話である。彼らは無事、家に戻ると豚を殺し、その肉を近隣や身内に分配した。戦地に行くと、たとえ男女関係をもたなかったとしても、周囲からは疑いの目でみられがちであり、その嫌疑をはらすために、豚を殺し、不吉払いのために共食をしたのである。

性に対する厳しいまでの禁欲的行為は、現在ではかなり弛緩したが、マイリナフをはじめ、全タイヤル族にわたって共通してみられた現象である。この例は雄弁に性に対する彼らの感覚を物語っているのだけれども、話を戻していうと、さきに挙げた特定の親族関係に立つ者は、性に対して厳しい態度で相互に律しあっていたという事実がある。この性に関わる禁忌は、性器露出のほか、性にまつわるすべての会話が対象となる。その禁忌に関連して他の地域のタイヤル族には次のような伝説が書きとめられ、残されているので、ここに紹介しておくのがよいだろう〔臨時台湾旧慣調査会 1915:35—36〕。

昔、ある家の娘が負籠を肩にして鋏を携えて畑に行った。娘は畑につくや籠を下して傍に置き、鋏で芋を掘り始めた。暫くしてなんとなく後をみると、大熊がどこからか来て、娘につかみかかろうとした。娘は驚いてためらう間に、熊は彼女を捕え大樹によじ登り、裸体となしてその乳房を噛切って食べた。樹から下り石を拾って再びよじ登り娘の傍らにきたが、娘は携えていた鋏で熊の手を斬落した。熊はたちまち地に落ちた。このときたまたま、叔父と兄の2人が来合せ、熊の負傷しているのを見て、これを殺した。兄は緑葉茂れる間に娘が裸体でいるのを見つけたが、妹の裸体を見るのは不吉なので、顧みずに去った。しかるに叔父は木の幹に伐痕を作ってよじ登り、ガーヤオ（姑婆芋）の葉で腰部を蔽ってやり、家に連れ帰った。

この引用文は原文を簡略化したものだけでも、伝説の骨子は明瞭であって、兄妹の関係に立つ者には厳しい性に関する掟があり、たとえ負傷して救助が必要なときでさえ、裸体をみてもいけないとする禁忌の戒しめを語り示すことにあった。このような伝説を念頭におきながら、性に関わる禁忌（プサニック）を整理してみると、次のようになる。

1. 女は男キョーダイ（イトコ、マタイトコも含む）に膝から上を見せたいはけないばかりか、情事や性に関わる会話もしてはいけない。もしこの禁を犯せば、状況により異なるが、酒もしくは着物一着ほどを賠償として男キョーダイに抛出しなければならないし、時として殴打されもする。

男が女キョーダイに対して情事の話をしてもらい禁で、規律に対する違反となる。しかしそのばあいは罰則は緩く、謝まるだけか、せいぜい少量の酒を差出すぐらいですむのがふつうである。

2. 第三者ですら、異性キョーダイが同席している場で、「あんた達は夫婦か」と質問したり、夫婦間の性に関係する話をしたりすること自体、穢れた行為であり、不吉、不浄な話をしたとして叱責される。

3. ヤナイ同士は性や情事の話をしてはいけない。それゆえ、ヤナイの面前では縁談話さえ軽はずみに口に出すべきでないといわれる。また妊娠した事実を直接的にヤナイに告げてはいけない。告げるときは、婉曲的なことばを選ぶのである。もしこの禁を破ると、酒を出して赦しを乞わねばならない。

体内からの排泄作用も特定の状況のもとでは不吉、不浄な行為として厳しく指弾されるのだが、それらの行為として、放屁、排尿、排便が挙げられる。その特定の状況とは異性キョーダイの面前、あるいはヤナイの居合せた場所でこれらの行為を行なうことで、そうすれば、厳しく叱責され、賠償が科せられ、旧慣違反者は何らかの物品、たとえば酒などを出して、償いをしなければならない。

もっとも、人前での放屁、排尿は礼儀に反する行為にはちがいないし、両親や上位世代者の面前ではとくに不作法 *okas gaga*（ない・礼儀）とみ

なされているのだが、彼らに対するこのような行為は積極的にプサニックとして処罰されない。さらには同性キョーダイの間でもまったく事情は同じである。ヤナイに対しての、また異性キョーダイ間での言動が厳しく問われるのと比べて、彼らに対する態度にはかなりの差が目につくのだが、他方、そのヤナイ同士の緊張した関係とまったく対照的なのは、マワン *mawan* 同士の打ち解けた関係である。マワンについては姻族名称の項で説明しておいたので、それを思い出していただくとして、このマワンの関係にあたる者同士は性や情事に関する会話や悪ふざけの行為がすべて許され、くつろいだ関係におかれる。冗談話がまったく自由に何の障害もなしに交されるのは、このマワン同士においてである。

一方の極に奔放なマワン関係をおくと、緊張関係が支配する異性キョーダイ間およびヤナイ同士との関係は、紛れもなく他方の極に位置する。そして彼らの行為はつねにプサニックか否かという規準で判断されるのだが、宗教的禁忌によって裏打ちされたこの極端な緊張関係の存在が、キョーダイ関係および義キョーダイ関係を特色あるものに仕立てあげていくのである。けれども、こうした態度の問題にとどまらず、ここでさらに検討を加えたい事柄は、マイリナフの住民が懐く出産をめぐるの民俗観念であり、そして出産という現象において産婦の男キョーダイが特別な役割を担って登場することこそ、マイリナフの親族紐帯の基本的特徴をなしているものであって、以下にその論述を試みたいと思う。

3 出産と穢れ

出産 *mas-olaqe* についてもさまざまな禁忌がつきまとい、かつその禁忌をみていくと、異性キョーダイ関係の重要性がはっきりとうかがえ、興味深い主題がのぞかれてくる。はじめに、旧慣が支配的であった時代に禁忌とみなされていた現象を取りあげてみよう。以下がその代表的な例である。

1. 家屋外で出産する例も珍しくないし、禁忌ともされていないが、ふつうは婚家の寝台で行なう。そのとき男性が家の中に居てもよ

いが、産婦の夫以外の男、とりわけ産婦の男キョーダイが産産の現場をみるのは、プサンニクである。なお、人手の足りないときに、産婦の夫が手伝うことは現実にはありえた。

2. 産産時、戸外で仕事をして生きた動植物に触れた者は、直接、家の中に入ってはいけない。戸口で火を焚いて手をあぶってからでなければならない。これには穢れ払いの意がある。

その他に、たとえば、双生子の産産は不吉、不浄であり、禁忌とみなされ、すぐに土中に埋めたのが旧慣であったことも付け加えておくと、ともあれ男キョーダイが産産の場に居合せることがもっとも重い旧慣侵犯とされていたのである。産産時の禁忌については、さらに以下のように補足しておきたい。たとえば人類発祥の地と説かれているピンスブカンの地に近いマシトバオン村では、戸外での産産は禁忌で、もし戸外で産産し出血をみると、暴風になるという民間信仰が最近まで語り継がれていたということであり、したがって産産儀礼も一様ではなく、地域の変差が見出されることになる。だがここでタイヤル族の産産儀礼について、概括して特徴を指摘すれば、儀礼は総じて未発達であるということになる。ところが次にみる産産時の穢れの観念だけはほぼ全域にわたって情報を得ることが可能であって、この観念の奥深さを覗きこむことができるのは、きわめて注目されることである。

産産には出血を伴い、また胎盤やへその緒の処理などの手間を要するのだが、へその緒に対する特別な観念はなく、ただ小刀で切るのは錆がつくから禁忌で、竹で切らねばならないと伝えるくらいであり、たいていは畑などに無雑作に埋めてしまう。しかしながら産産時の出血、そして汚物に対しては、ロウス ro'us つまり穢れという観念が見出せ、マイリナフの産産に対する観念が浮彫りにされる。今ここでロウスを日本語の「穢れ」という語に訳しておいたのだが、その理由は以下の文面から読みとることができるだろう。その始めとしてロウスの語義をまず検討してみよう。

ロウスは、オラオ orao つまり汚(よご)れの概念とは異なることを承知しておく必要がある。後者は、ほこりや食物のかすが体や衣服について

いて汚ないことを指すし、また泥で汚れている状態に対してはとくにマチラン matsirang という用語があてられる。いわばそれらは物理的状況・状態を指して使われるのだが、ロウスは観念的なものであって、気持の悪い、あるいは気味の悪い感情を呼び起されたときに、使われる語である。具体的例を挙げてみよう。

1. 毒蛇を踏みつけると気味が悪い。そのときは、ロウスとなる。
2. 変死体を見たり、触れたりすると、気味が悪く、不吉な感情を呼び起されるので、ロウスとなる。
3. 便や嘔吐物などの汚物に触れるのも、同じような理由からロウスとなる。
4. 腐った食物をみたり、食したりしたときにも、やはりロウスとなる。
5. 汚ない着物を着た人、全身にできものがある人が隣りに座ったら、気味が悪くなるので、したがってロウスとなる。
6. 悪い夢(不倫の関係や殺人、蛇に咬まれる、などの内容の夢)をみたら、ロウスとなる。

以上は、当事者が気持悪くなったり、うす気味悪く感じたりして、心的状態に異常をきたす例であるが、これに加えて、さらに次の内容を述べておかねばならない。

7. 異性キョーダイが慣れ慣れしく一緒に並んで座ることは、ロウスである。
8. 異性キョーダイ同士が情事や性に関する会話をするのは禁忌であることはすでにみておいた。情事の話をしたら気味が悪くなるので、こういう文脈で、ロウスという語を使う。そして最後に、産産と女性の生理について語る必要がある。

9. 産産は男性キョーダイにロウスをもたらず。産産時の血や胎盤、へその緒は彼らにロウスをもたらずわけである。ただし産婦自体はそれらに触れても、ロウスとはならない。
10. 月経 ho'o は本人自身にとってはロウスではないが、男キョーダイがみたときは、彼らにロウスが及ぶ。月経の血はたいてい誰にも見つからぬように女性が始末してしまうので、実さいに問題が起ることはきわめて少な

い。

今までの記述で血 ramoh の問題にふれたが、若干の補足を試みるに、血一般が穢れをもたらすわけではないことを明記しておきたい。たとえば負傷して出血しても、その事自体は穢れとはならず、ただかか気の毒に思うくらいにとどまる。血の穢れということで問題になるのは、生殖と生理に関わる出血である。ただし生理に関する出血は秘密裏に処理されてしまうので、ふつうは公然と知れわたることがなく、したがって、生殖に関する血がことさら重要な意味を帯びてくる。

すでに述べたように、出産時の出血と汚物は、つねに男性キョーダイに穢れを及ぼすとされていたのだが、男性キョーダイがそれらに触れなくても、ただ出産があったという事実だけで、穢れとなる。そして、他面において、こうした穢れの現象は異性キョーダイ関係の重要性をはっきりと浮び上らせている。マイリナフ方言では異性キョーダイを指称する用語は欠けているのだが、このような慣行の存在から、その関係こそはさまざまな親族紐帯のなかでもっとも重要な位置を占めるとさえいえるだろう。だがここでは話を戻して、生殖に関わる血と汚物が穢れを及ぼすとする地元民の見解を取り上げておくことにしよう。以下は男性によるその説明である。すなわち、兄弟と姉妹とは同じ親 qotox tso yaba, qotox tso yaya (一つ・の・父、一つ・の・母) もしくは同じ上位世代者 qotox tso nabakis (一つ・の・上位世代者) から生まれた存在であり、ともに親から生殖行為によって出生したのに、その一方の片割れ(姉妹)が新たに生殖で血や汚物を排出するところに、他方(兄弟)にとって気味悪さがあると穢れの原因は説明される。イトコ、マタイトコも世代を朔れば同じ親 qotox tso nabakis に辿りつくのであって、基本的には兄弟姉妹の關係に還元されてしまう。かくして、このような地元民の説明をとおしてみると、生殖行為によって生じた穢れの觀念は、異性キョーダイ關係が特別な紐帯で結ばれていること、その紐帯がことのほか重要であること、これらの事実を浮彫りにさせてくれるのである。

4. 穢れ祓いの慣行

出産でもたらされた穢れは、すみやかに祓わね

ばならず、そのため穢れ祓い homau na ro'us (祓い・の・穢れ)の慣行が、現代では衰退の傾向にあるとはいえ、旧慣がまだ根づいていた時代では、厳格に行なわれていたことを前節ではみてきた。この穢れ祓いの慣行は、出産後すぐに、遅くとも1ヶ月以内ぐらいに、つまり出産の事実が噂として間接的に妻のキョーダイの耳に入る以前に、行なわねばならなかったとされる。

穢れ祓いの慣行の目的は二つあって、そのうちの一つは、すでに述べてきたように、子の出生に伴って生じた穢れを祓うためであり、他の一つは、新生児が健康に育つよう、また将来の幸福が得られるよう、にと祈つてのことである。むろん祈ってもらおう相手はヤナイ yanai であり、形式的には、子の父(夫)が母(妻)のキョーダイを訪れ、酒杯を献上することである。ただしこの席でヤナイに対して、子どもの出生の事実を直接的にことばで表現するのは禁忌とみなされているが、その理由は出産そのものが性と生殖に関わる営みだからである。しかしヤナイは、もちろんこの訪問が何を意味しているのか、察知しており、無言のうちに酒杯を受けることによって、穢れが祓われ、かつ出産の事実が伝達されたことになる。

妻のキョーダイを訪問するのは、産婦の夫とは限らず、とくに夫が出産の手助けをしていようものなら、その手にはヤナイが忌み嫌う穢れが付着していることになるから、誰か他の人、たとえば夫の父が訪問したりすることがあって、必ずしも一定していない。他方、訪問相手は直接的には妻の実兄弟であるが、正式にはこの慣行はヤナイ間でとり行なわれるものとされる。妻の実家でその酒宴が設けられても、その席にはヤナイ、つまり妻の兄弟のみならず、従兄弟(いとこ)、再従兄弟(またいとこ)も参加するよう、招集されるし、もし妻の兄弟がいなければあいは、杯を傾ける相手は従兄弟、再従兄弟である。たとえば、以下は妻に兄弟がなく、そのためイトコに献酒した例であるが、兄弟がいなければあいのすべてはイトコに献酒しているので、この事例はふつうの型に属するといえる。

B氏は結婚したのが17才のときで、日本統治時代のことであった。子どもが生まれたらすぐに酒・豚肉を持参して妻の兄弟を訪問し、

妻のイトコらも招待して会食するのがきたりだったが、あいにく妻に兄弟がいなかった。そこで妻のイトコのH氏(妻の母の兄の息子)を訪問した。H氏の父は嫁を紹介してくれた人でもあり、その息子のH氏とも実懇の間柄にあったのだが、慣習に従い、出生のつど彼の家を訪れた。そこにはヤナイたちも多数集まり、酒宴がもたれた。

酒宴には、遠隔地に居住している人たちが必ずしも参加するとは限らないのだが、住民の意識の上では、妻の兄弟のみならず、ヤナイ全体が穢れ祓いの対象とみなされている。この点は大切であり、その事実を力説し、それがはらむ意味を補強して述べるために、ここで結婚式の一場面を取りあげ、さらにいっそうヤナイの果す役割の重要性を確認しておくことにしよう。

現在でこそ急速に都市風の結婚式が流行しだしたが、旧慣時代では、一連の結婚儀礼の中にヤナイが象徴的役割を帯びて登場する場面が二つあった。最初の場面はチナチョ tsinatyo (原義は約束の意)と呼ばれる行事のときであり、それは結婚式の日取りが決った後、たいていその式の前日頃に行なわれるのだけれども、このときに新夫は妻方に赴き、妻のキョーダイに山刀を一本贈呈するのが習慣であった。新郎は妻の実家で、親類縁者の居並ぶ中を、誇らし気に山刀を地面に突き刺し、その切れ味を自慢し、新婦の父や兄弟はその山刀の品評をしいながら丁寧に受取る。山刀はたいてい妻の長兄の所有物となるが、兄弟がいなければ妻の父あるいは母が所有することになる。いずれにせよ、この行事が完了しないかぎり、正式な縁談は成立しえず、結婚式は開かれぬ。ちなみに、この行事の目的は、地元民の説明によれば、「これ以後、あなたの姉妹は私のものになります」という確約のこぼを投げかけることであり、結局は妻を確保するための最終的な約束の意味がそれには込められていたといえる。

第二番目は、結婚の披露宴 manabu-qwao-nai (飲む・酒・会)のときであって、そのときに新夫は居合せた妻方の親族員と杯を交わすのだが、この杯を交わす相手は、言語上のカテゴリーからすると、二種類に分類される。つまり、宴席では杯を汲みあわせ、名乗りあうがこの名乗り合いの

杯には二種類あり、そのうちの一つはヤナイの関係に立つ者すべてと交わす杯であって、その杯を交す目的は穢れ祓い homau na ro'us のためだと明確に意識されている。これに対して二つ目は、妻の父母を含めヤナイ以外の者と交す杯であって、それは homau na kageheyan のためだといわれている。この語の正確な日本語への翻訳は難しいが、その主旨には、「今後は姻族関係が生じるので、ソワゲ sowage、イサハ isah などと呼んで名乗りあおう」という内容が込められている。さしあたっては、彼らに対しては穢れという語が用いられないのに注目すべきであり、穢れは妻の男キョーダイにのみ及ぶとされる観念がこの献杯の挨拶に確認されたことになるが、それというのも、結婚は直接的に性と生殖に関連する事象にはかならない、からである。

ヤナイの重要性が確認されたところで、子どもの誕生をヤナイに伝達する慣行について再言しよう。この慣行は当然のこととして、すべての子どもの出産にさいしてとり行なわれるのだが、もしこの慣行を破り、ヤナイに対する通知を怠ったら、不吉な状態がもたらされ、ヤナイは穢れた状態におかれ続けることになる。しかもこの状態にヤナイがおかれているかぎり、新生児には不幸が招来されてしまい、大きく成長しないし、病気にもなってしまうというのが、地元民の説明である。表現を変えていえば、男キョーダイは女キョーダイの子に対して、祝福も与える一方で、不幸にもさせる立場におかれている、といえる。

穢れ祓いがすんだ後ではじめて、ヤナイは子どもをみることができ、親はその子連れてヤナイに挨拶に行くことができる。誕生後、1、2ヶ月ほどたって、遅くとも1年以内にパカラマツ pakarama' という儀礼が行なわれるが、それはヤナイの穢れが祓われていなければ行なうことができない。パカラマツの儀礼とは、子連れて、餅・肉・酒を携え、妻の生家を訪問することで、生家では妻の親族が参集して宴会を催し、その席でヤナイは子どもが長生きするように、祝福のこぼを投げかける。帰宅にさいしては、ヤナイをはじめ親族は子どもに、着物、銭、餅などを持たせてやり、それでこの行事は終了する。

パカラマツの儀礼もすべての子どもを対象にし

て行なわれるのだが、人によっては長子と次子以下で、儀礼の規模で差をつけている例もみられる。たとえば、ある老人は過去を回顧して次のように語る。すなわち、

第一子が生まれたときは、牛を殺し、その肉を妻の生家に持参して盛大に祝宴を開いた。その盛大さは結婚式に匹敵するほどであった。

第二子が生まれたときは、豚を殺した程度で、比較的簡素であった。

第三子以下は、酒、餅、豚肉の切れ端など簡素な品物を持って行ったにすぎない。

第一子は派手に、それ以下は地味に行なうのが一般的なようであるが、いずれにせよ、ヤナイから子どもが祝福を受けることに、この儀礼の目的がある。この儀礼の後には、公式的な、つまり特定の名称で呼ばれる儀礼は存在しないのだが、村人の一部には、子どもがよく病気になる、何度も生家に連れていくという意見も聞かれる。その人たちが申し立てることには、生家に連れていくと、その者が喜び、そして彼らが喜んだら、子どもの病氣も治る、と生家帰りの理由を説明していることであるけれど、ただしこのような見解に懐疑的である村民もけっして少なくない。要するに妻の生家にどの程度、呪力を認めるのかは、個人差があるようであり、一定している訳ではないので、この点はひとまず措くとしても、子どもの出生届けをヤナイに通達する点だけは、すべての伝承者に共通して聞かれたことであり、しかもこれと類似な慣行がタイヤル族全体にわたって広範囲に聞くことができる事実には、さらにいっそう考慮しておくべきである。

5. 周辺地域の事例

言語のうえでも、生活習慣のうえでも、タイヤル族の文化的特徴には、かなりの変差が見出せるのだが、ここで論じている事柄に関しては斉一的な拡がりをもって各地に遍在していて、その事実よりこの慣行の根の深さを知ることができる。以下に、いくつかの聞き書き資料を紹介し広域に分布するこの慣行の実態に理解を深めておこう。

北港溪上流のマシトバオン村はスコレク系統の

タイヤル族にとってもっとも由緒のある村落である。方言や習慣の面でマイナリフとは少しばかりの違いがみられるとはいえ、この種の慣行には両者共通の部分があって、興味をわかしてくれる。ここでも、子どもが出生したら、すみやかに妻のキョーダイ、つまりヤナイにその事実を伝え、その後ヤナイ全員を呼んで祝宴を開く慣行が形骸化したとはいえ、今も一部には行なわれているのであってその行事はピトカハット pitkahat と呼び慣わされている。出産時の出血や汚物は、産婦のキョーダイにロウス rous (穢れ) を及ぼし、その穢いの意味で饗宴を張るのであるが、もし出生の事実をすみやかにヤナイに連絡しないと、悪口をいわれ、陰口をつかれてしまう。子ども自身も成長してからでさえ、礼儀のない子どもと悪口を言われ続け、冷淡に扱われる。そのうえ、その子は将来成功しなくなるし、病気をしたり、災に出会ったりしてしまうとまで信ぜられていたほどである。

マシトバオンの近在にあって、スコレク系統の中で古い歴史を誇るマリッパ村でも、同様な慣行は存在していた。ピタカハット pitakahat とここでは称されていて、これを怠ると、子どもの将来性はなくなるし、病氣にもなるとさえいわれていたことは、やはり同じであって ini palaqeyasu laqe (ちがう・育つ・子ども) とその子は考えられてしまう。つまり丈夫には育たないということである。なおまたヤナイにお祓いをしないと、その子は姦通 anapal してできた子と同等とみなされ、ヤナイから辛辣に酷評され、uka yaba ma-qoleq (ない・父・泥棒) とか、kanuleq laqe (盗む・子) とか陰口をつかれてしまうことさえありえた。これらのことばには、婚姻外の関係で生まれた子という意味内容が含まれていて、あたかも非嫡出児の如くに周囲からみられてしまうことを告げている。

桃園県のガオガンと通称される地域のエヘン村では、新生児の誕生をヤナイに告げる行事を gaga mahoralaral と称していたけれども、それは「昔の年寄りからの習慣 gaga」という意味である。出産後、穢れを祓うために行なわれたが、ヤナイに知らせないのは掟を破るものであり、不吉や不浄をもたらしてしまう、つまりプサニックな

行為とみなされ、そして、そのばあいだと子どもは, kinahamitan laqe (罰・子)あるいはuqatsu yaba qinayat (なし・父・養なう)とさえ陰口をつかれ、軽蔑されてしまう。これらのことばが語る内容は、「昔の年寄りからの慣習」を無視すると、あたかも「父なし子」のような扱いかいを受け、周囲から冷笑され続けるということである。

ブトノカン村はこのエヘン村の川向いに位置していて、ほぼ似た習慣を伝えてきた。ティンカハット tinkahat という行事は、新生児が生まれたあと酒などを持ってヤナイに誕生を知らせに行くことだが、この知らせを怠ると、子は将来、成功しないし、病気をしてしまうといわれていた。ヤナイの存在を無視すれば、ヤナイは女キョーダイの子どもに対して徹底的に冷淡になり、そしてその子は kinahamitan laqe, あるいは uqatsu yaba kanulyaq とさえ揶揄されてしまう。

桃園県の大崙崙溪流域付近もスコレク系の移住民が点在しているけれども、そのうちのウライ村でも、出産に伴う男キョーダイの穢れを祓うために、チンカハット tsinkahat と呼ばれる行事が行なわれていた。この儀礼を欠くと、産婦の男キョーダイは立腹するし、子どもはといえば病気に将来性がなくなり、ある伝承者に至っては、子どもは片身の狭い思いをし、両親がいてもその両親から財産を貰えない破目に追いやられてしまう、と口述したりする。さらに付け加えてその伝承者が語るには、そうした子供は kinahamitan laqei (私生児)と周囲の目からみなされてしまった、ということである。

同じく大崙崙溪流域付近のヨーハブン村でも同様であって、ピントカハット pintakaha' の行事を怠ると、新生児は神の罰を受け saagung utox laqei su (怒る・神・子ども・あなた)、病気になるりして死ぬときえもいわれていた。その子は私生児と同じ扱いかいを受け、uqatsu yaba kanulyaq (ない・父・盗む) あるいは kanulyaq na ma-a-laqei (盗む・の・出産)といわれもする。母の男キョーダイたちはその子(女キョーダイの子)の面倒をみず、子どもは成長しても一人前の資格はないとされ、仲間はずれにされ、周囲から

信用もされず、意見を述べても聞き入れてもらえないことになる。そもその原因は産婦のキョーダイの穢れが祓われていないためであり、そして穢れる理由は、自分と同じ親から女キョーダイは生まれたのに、その片割れが生殖で血や汚物を排出してしまったから、ということにある。

北港溪上流の村マカナジーからの移住村である台中県のクラスでは、musa homau (行く・祓い)という名称で、ヤナイに子の出生通知を行っていた。ヤナイは新生児の将来を願って祝福のことばを贈るのだが、これがなされないとヤナイは穢れのまま放置され、そのため立腹して当然とされ、その結果は子どもは iya mbalaq makainux (ない・上等な・人生)すなわち将来性がなくなってしまう、とみなされている。厳しい性格のヤナイだと、その子は姦通(anapan)でできた子どもとも、kanuleq na laqe (盗む・の・子)あるいは kinhamitan laqe (罪・子)とも、つまり不倫の関係でできた子に等しいとまで陰口を叩かれてしまうのである。

独水溪上流の村シクンでも、子どもが生まれたとき、ヤナイに酒を献上し、出産での穢れを払うことがかつては行なわれていた。ティンカハット tinkahat と呼ばれるこの儀礼を怠ると、ヤナイは侮辱されたとして怒りを顕にすることさえもあったという。

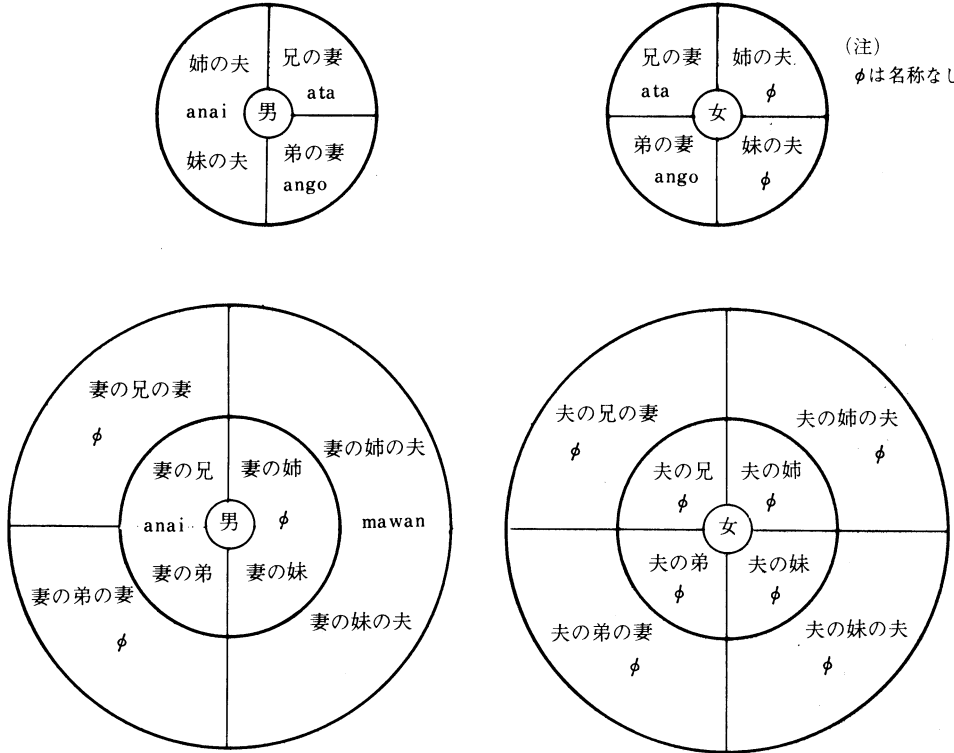
6. キョーダイ関係の重要性

今までの論述から、キョーダイ関係および義キョーダイ関係の重要性が浮びあがってきたのだが、ここでマイリナフの事例をタイヤル族全体の中で位置づけながら、出産時の穢れ祓いの慣行がもつ意味について再度論じることにしよう。

親族関係名称については、同世代姻族語彙の複雑化を指摘しておいたけれども、その複雑化の度合いはタイヤル族の中でも一様ではない。スコレク系はツオレ系統のマイリナフと基本的に同じ型を示すが、セデック系統は第3図に示されるように、両者と比べてかなり異質である。若干の解説をすると²⁾、

2) これについては、詳しくは、山路1982、を参照のこと。事例は花蓮県秀林郷丁村からの聞き書きである。

第3図 セデック系統の同世代姻族名称



(注)
φは名称なしを表す。

ata=兄の妻，従兄の妻，再従兄の妻。つまり類別的兄の妻。
 ango=弟の妻，従弟の妻，再従弟の妻。つまり類別的弟の妻。
 anai=姉・妹の夫，従姉・従妹の夫，再従姉・再従妹の夫。妻の兄・弟，妻の従兄・従弟，妻の再従兄・再従弟。つまり類別的姉・妹の夫，妻の類別的兄・弟。
 mawan=妻の姉・妹の夫，妻の従姉・従妹の夫，妻の再従姉・再従妹の夫。つまり妻の類別的姉・妹の夫。

第3図中でφ印は名称語彙が欠落していることを示し，それだから，たとえば他人に紹介するときには続柄の表示，たとえば「夫の姉」というように表現するにとどまる。全体的にみて，他のタイヤル族と比べてみると姻族語彙はこのように乏しく，妻よりする夫側名称，夫よりする妻の姉妹に対する名称は欠けているのであるが，それでもアナイ anai およびマワン mawan という共通の語彙が存在し，しかもその語の指示内容もマイリナフの事例と同じである。

自己と同世代のキョーダイ名称では，マイリナフとセデック系との間には顕著な相異がみられる。マイリナフでは異性キョーダイを指示する包括的名称は存在しないのだが，セデックではハルマダン halmadan という語があって，それは自己と同世代でかつ異性関係にある者が相互に，たとえば兄弟が姉妹に対して，姉妹が兄弟に対して謂いあうところの語彙である。ところがスコレク系統では，さらに同世代キョーダイ名称は複雑になっている。芮逸夫はマシトバオン村の名称体系を報告しているが，その中には次の語彙がみられる〔芮逸夫 1950 (1972:1281—1282)〕。

- rawin——男子専用以称同性平輩親属，不分年齢長幼，即堂兄・弟，再従兄・弟，族兄弟及姑・舅・姨表兄・弟，堂姑・舅・姨表兄・弟，再従姑・舅・姨表兄・弟等。
- langi——女子専用以称同性平輩親属，不分年齢長幼，即堂姉・妹，再従姉・妹，族姉・妹，及姑・舅・姨表姉・妹，堂・姑・舅・姨表姉・妹，再従姑・舅・姨姉・妹等。
- nəqun——(1)男子用以称异性平輩親属，不分

年齢長幼，即姉和妹，以及堂姉・妹，再従姉・妹，族姉・妹，姑・舅・姨表姉・妹，堂姑・舅・姨表姉・妹，再従姑・舅・姨表姉・妹等。
 (2)女子用以称異性平輩親属，不分年齢長幼，即兄和弟，以及堂兄・弟，再従兄・弟，族兄・弟，姑・舅・姨表兄・弟，堂姑・舅・姨表兄・弟，再従姑・舅・姨表兄・弟等。

このスコレク系統の事例では，男女とも同性同世代の名称として，それぞれラウィン rawin，ランギ langi があり，異性同世代に対してはナクン nəqun と称谓しあっていることになる。スコレク系統のナクンは，セデック系統のハルマダンと用法上は同じであって，このように異性キョーダイを指示する包括語がみられる点で，ツオレ系統のマイリナフと相異を示している（第4図参照）。

かくして名称上は，異性キョーダイに対する包括名称をもつ地域とそれを欠く地域と変差が見出されたのであるが，ひるがえって子どもの出生を義キョーダイに通知する慣習を取り上げてみると，きわめて広い範囲に分布していたのが確認できる。この慣行の根幹にあるのは穢れ祓いであって，マイリナフでは，子どもの出産は産婦のキョーダイに穢れをもたらすから，その祓いのために必要なのだ，と説明されていた。このように説明する地域も広範囲にわたっていて，この慣行の根の深さを知るのであるけれども，さしあたっては性と生殖に関わる出血は異性キョーダイ間に緊張と対立をもたらすことに注目しておきたい。儀礼的もしくは宗教的観点からすれば異性キョーダイ関係には重要な意味が担わされていたことになる。

マイリナフでは漠然としていたことだが，多くのスコレク系統の間では，この儀礼が行なわれな

いならば，つまり男キョーダイの穢れが祓われていないならば，子どもはあたかも非嫡出子の如き地位に甘じなければならない，という見解が広まっていたことを報告しておいた。要するに，父母の結婚が法的に承認されていても，それだけでは子どもはその存立が認知されたとはいえない訳である。かくして，以上までの論述を整理してみると，次のようになろう。すなわち，出産，つまり生命の再生産という人間生活の根源に関わる事柄が親族の基本的性格をなすと考えるならば，その生命の再生産に宗教的もしくは呪術的に関わりをもち，生まれ出た子どもに社会的存立の保障を与える産婦の男キョーダイこそが，タイヤル族の親族紐帯の根幹に位置する者なのだ，という事実が指摘されることだろう。この世に生れ出でた子どもを無事存立させていくにあたっては，彼ら，産婦の男キョーダイの存在は不可欠なばかりか，彼らによってそもそも子どもの存在自体が規制されていた訳で，この点を考えるなら，さらにいっそう異性キョーダイ関係の重要性を強調しておいてよいだろう。

(附記) 本稿の素地をなした野外調査をなすにあたり，中央研究院民族学研究所（台北・文崇一前所長，劉斌雄現所長）により調査便宜を受け，また地元民からはご厚情をいただいた。ここに記して感謝したい。

引用文献

芮逸夫 1950 (1972) 「瑞岩泰雅族的親属制初探」『台湾文化』6—3・4 (後に，『中国民族及其文化論稿 下』芸文印書館 台北 1972，に所収。)
 臨時台湾旧慣調査会 1915『番族慣習調査報告書』第1巻，台北。
 山路勝彦 1982 「台湾サデック族の義兄弟と子どもの認知」『南島史学』19号。

第4図 同世代の同性および異性に対する名称

